

2020年度 第2四半期 決算説明会 質疑応答（要旨）

Q1) 今期の通期業績予想に関して、上期と下期の利益計画の違いについて、主な要因を教えてください。

- A1) 足元で国内旅客や国際貨物の需要回復が顕著となっており、収入は下期に大幅に回復する見通しです。一方、下期の費用計画は、上期との主な違いとして以下2点を反映しています。
- ・減価償却費：機材の一部について受領時期を上期から下期に後倒し
 - ・人件費：業績連動型の一時金の減額は上期に反映
- コスト削減の取り組みを継続することで、業績の改善を追求していきます。

Q2) 国際線貨物事業の当面の対応について教えてください。

- A2) 現在は大型機を含めた全てのフレイターを成田発着路線に集約した上、最大限に活用しています。貨物マーケットにおける需給バランスの逼迫が続いていることから、当面は需要・単価水準ともに堅調に推移すると見通しており、今後もこの運航体制を継続します。輸出入貨物のみならず、日本を経由する三国間貨物も含め、積極的に需要を獲得していきます。

Q3) 早期退役の対象となる機種を教えてください。また、今期に計上予定の特別損失の内、機材退役による影響額はどのくらいですか。

- A3) 機材の早期退役は、ボーイング777型機、767型機、737型機を対象とします。本日の適時開示でお伝えしたように、今期に計上を予定している特別損失約1,100億円の内、およそ7割が機材退役に伴って発生する計画です。

Q4) コスト削減策について、来期以降も効果が持続する項目はありますか。

- A4) 機材数の圧縮により、当面は機材費や整備費を削減することが可能です。また、コロナ影響の長期化を想定し、来期も人件費の抑制に努めます。
- 中期的には、コスト削減策の継続と合わせて、オペレーションにおける省人化を推進するなど、ユニットコストを引き下げていくことが重要と考えています。生産性向上も追求しながら、コスト競争力を高めていきます。

Q5) 来期の旅客需要の水準をどのように見通していますか。

- A5) 今年度末時点における旅客数は、コロナ前の水準と比べて国内線が7割、国際線が5割まで回復する前提としています。足元では国内旅客の需要が下期の計画前提を上回って推移しており、来年度に向けて改善していくと想定していますが、楽観することなく、来期の収支均衡に向けてコストマネジメントを徹底していきます。

Q6) 第3ブランドのビジネスモデルについて、教えてください。

A6) 第3ブランドでは、現在 ANA が国内線で使用しているボーイング 787-8 型機を活用することを検討しています。当社グループとして、Peach で蓄積してきた LCC ビジネスのノウハウを活かし、アジア・オセアニア路線をターゲットに事業を展開する方針です。エアー・ジャパンのリソースを活用した迅速な事業展開を前提に、運航乗務員等の人件費を変動費化することで、イベントリスクに備えたポラティリティ耐性が高い仕組みを構築することが可能と考えています。

以上